

音楽のよろこび

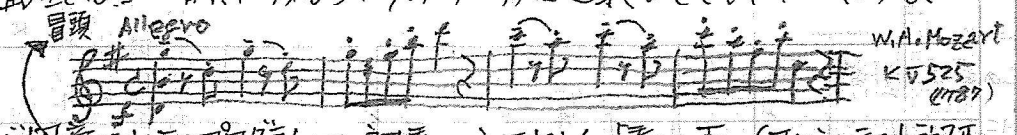
京響メンバーによる大人の音楽教室
2022. 1. 17. (2017. NO.1より37号) 今年度NO.5
発行文責担当事務局 田中正希

♪ 年が改まり、もう半期以上... 皆様がお気軽に「ニューイヤーコンサート」に参加される事を、全員で喜びたく思います。

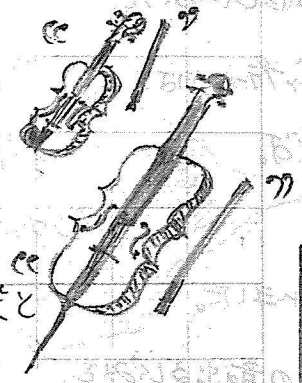
年明け前後より、又も、木にノックか、勢いが増し、不気味な日々が続きますが、科学的知見にもとづき、正しく対処お生活を送る今年も音楽とともにある豊かな日々、人生を創っていくためのものです。

♪ さて今日は、今年の音楽、ことばじめ、「ニューイヤーコンサート」を楽しみましょう。

弦楽四重奏、ヴァイオリンニ、ヴィオラ、チェロの組合せ、このジャンルは、数々の名曲が、うみ出されて来まして。この講座では、人前、トヴェルニエの「アメリカ」を聴かせていた「イタリア」も、



♪ 今回、京響の皆様が用意されたプログラムは、初春にふさわしく「春の声」(ジョン・ラトル指揮、フルイエ)、何度聴いてもよばらしい、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」(W.A.モーツァルト)、「ソババ」(アンダーソン) その他、美しい映画音楽... 等も用意とが... そして、有名な「ひばり」(FJアラマヨセストロイシ)。楽しんで、中味濃い弦楽四重奏(ストリク、クアルネスト)を堪能お時間としよう。そして、メンバーは、この講座、初お目見之のヴァイオリン松谷由美さん、安井優子さん、チェロ佐藤響さん、ヴィオラおはみ金本孝子さん(本講座監修者様御時)、さあ、開演です。



受講者のステキなミニレクチャーライブを11月21日まで

会場、河原町学舎1階 教室です。
次回は... 2月14日(月)
「打楽器」は。
講師 中山航介さん他。
(京響打楽器首席)
A.D.は 13時30分 ~ 15:30

♪ 前回のフルト、よばらしたてはね。
上野博昭さん(京響フルト首席)は、フルトの起源から現代までいかに...。そして、本講座のために、わざわざ、フルトの古い時代の楽器、トラベルを輸入し、その音色を聴かせてくれたに感謝。
ピッコロのスペシャリスト 坂田愛夏さんも、高く、美しい音色をステキに聴かせてくれました。ピアノの河合琴絵さんも、笛の御二んも、ステキに演奏するよばらしい演奏でした。
本当に、ありがとうございます。!!

やはり、ドジャワのSomataがフルト二重奏の良さを、(ニッソリ) 味わせて頂きました。三人の演奏者、思ひ込りにして、演奏の中、澄みきった美しい、軽妙、機敏、歌い、躍動感、にやにや、平穩、勇気、の感情が流れる、人王のストーリーの様は、感動いたしました。

「江」の曲を聴き、勝手は情景をいこと...
1章 心ざみく秋風が吹くほめる頃
2章 一年で最も華やくそがの紅葉粉、あざやかに、心地よく、幽玄に満ちて
3章 紅葉の鏡演 響き合からやがて、風舞は、スリ、の流れる、遠く自然の終り、輪廻 塩見淳子様。

フルトのこやがめで、すばらしい音色に癒やされました。
毎回、講義のほかに十分準備とされている事に敬服、感謝いたします。

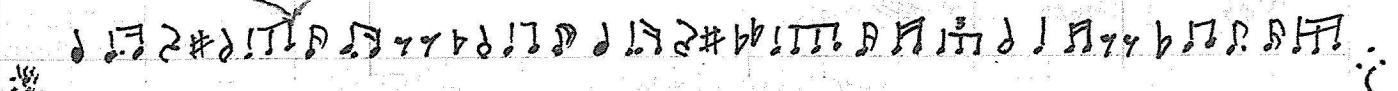
よばらしいコンサートでした
ありがとうございます
いつも感謝いたしております

今度の演奏会の中にも感動した、1、2位のフルト演奏会でした。真島さんの京都にては、初めに聴きました。すばらしい旋律で、燃えるような京都の秋の紅葉が目にうつりました。DVDの演奏などに使われているので、すばらしい、すばらしい

いつもアンケートに協力いただきありがとうございます。

フルトへの愛が感じられる前に、事前に多くの時間を用いて準備されたこと、ありがとうございます。演奏は、心があられしていました。

系統で、明快な解説で、フルトの歴史がとてもよく理解できました。素晴らしい演奏と堪能しました。田中邦彦様



それは尊敬の気持ちからではなかった。それは愛だったのだ。私がこの人の下男になってもいいとまで思った時のその感動は。私は彼の偉大さを知っていたと同時に、彼のみにくさ、彼の傲慢、彼の偏屈を知っていた。しかし、むしろそれ故にこそ、彼の音楽を通して彼とむかい合う時、私は彼に対する私の感動を愛と呼ぶより他なかった。私は彼の音楽を愛した。しかし、それだけではなかった。私は彼の音楽を通して、ベートーヴェンその人も愛したのだ。感動ではなく、私はそれを信じている。芸術作品の中に、その作者を見ることが大変なやさしいようで、実は難しく危険なことだ。だがベートーヴェンは私にとって、ひとつの不思議な例外なのだ。私にとっては、ベートーヴェンは芸術家すら超えている。私は彼の音楽を、芸術としてというよりは、むしろ私の愛する人間の私への親しい言葉、やさしい身ぶりのように受けとっている。心挫けた時、私は一人の親しい友人に会うように、またそれ以上に、愛する者に慰めとあげましを求めようようにベートーヴェンに会う。勿論こういつきあい方がすべての人に正しいとは限らない。しかし私は、自分がベートーヴェンを愛し得たことを幸せだと思ふ。ひとつの芸術作品を愛することさえ、たやすいことではない。まして、その作品を通して一人の人間を発見し、その人を愛することが出来るというのは稀な幸運なのだ。私はあえて幸運と云う。大げさな言い方だが、それはひとつの運命的な出会いのように私には思えるからだ。ひとつの作品をいくら理解し得たとしても、私たちがその作品とのむすびつきははしれている。本当のむすびつきは、理解という言葉を超えたひとつの共感、おそらく時には愛とさえ呼ぶことの出来るひとつの肉体的な感動に始まるのではなからうか。その時、芸術もまた本物の芸術として私たちの中に生きる。そこに至る道程は、しかし説明することの出来るものではない。私もただ、私の愛する人と作品とのまわりを、つたない言葉でめぐらただけなのだ...

♪ 毎回、紹介しております音楽に関する詩や文学的成句、今回は90%を越え、今はお話しが、詩人、谷川俊太郎の著書「愛のパンセ」から...です。このページ以降、2ページまでベートーヴェン、その音楽、人王を受けとめて、生きた詩人の興味深いエッセイが綴られています。次回も、この欄で、もうお話し紹介しますが、興味ある方は、本をお読み下さい。...。尚、この本の装幀は、「山のパンセ」を著した谷川俊太郎の著作から、この欄に文章引用し、事もありません。美しい本です。M. TANAKA

ベートーヴェン 詩人、谷川俊太郎 著
「山のパンセ」から... 新風舎文庫 P110-151

